

シリーズ第28回

笛吹市探訪

― 芦川町の古民家 ―

芦川町には、かぶと造（づくり）の民家が多く残っています。横（妻）から見ると大きな開口部などがあり、兜（かぶと）の形に似ていることから、かぶと造と呼ばれています。

一般的にかぶと造は、江戸時代の18世紀頃に発生し、幕末にかけて普及しましたが、明治時代にも造られ、屋根裏を養蚕に利用する時の換気や採光のために、考え出されたと言われています。



かぶと造の民家

このかぶと造の家は、全国に分布していますが、養蚕の取引のあった地域の間には伝わったという説があり、東京や神奈川のかぶと造は、山梨から伝わったものと言われています。山梨県内には個性的でいろいろな形式ものが多い見られますが、甲府盆地の東部地域には存在しないのも特徴です。

かぶと造の棟（むね）の上に太い角材を組んで置き、その重さで棟を押えた構造を、山梨では合掌（がっしょう）と言います。かつてこの合



左右が異なる民家

掌をのせた草葺の民家が芦川には多く見られました。

一般的に、富士川水系の国中（くになか）地域と桂川水系の郡内（ぐんない）地域では民家の形式も異なりますが、芦川は富士川水系であるにもかかわらず、民家形式は郡内の系統で、郡内文化圏も北限と考えられています。ただ、左右のかぶとの形が異なるものが多いこと、かぶとと寄棟（よせむね）四方にふきおろした屋根（なご）の組み合わせが見られることが、郡内地域とは異なる点です。特に後者は、国中地域の影響が考えられます。



茅葺の民家

左の写真は、芦川町内に残る茅葺屋根の古民家で18世紀半ばに造られたと考えられています。

現在、大半の民家はトタンの屋根で覆われていますが、これほど多くの古民家が集中して残っている地域は、県内をはじめ近隣の都県にもあまり多くありません。

市教育委員会では、今年度からこの古民家に関する学術調査を実施しますので、芦川町のみなさんご協力をお願いします。

今回は、「武田氏と笛吹市」をお休みします。